

出版物紹介

潘秋静著『中国独立学院制度の発足・普及・変貌—高等教育発展の新たな試み—』

中国独立学院制度の 発足・普及・変貌

高等教育発展の新たな試み

The Emergence, Expansion, and Transformation
of China's Independent College System:
A New Approach to Higher Education Development

潘 秋静



ユニークな高等教育機関——独立学院 についての類書なき総合的研究！

日本同様、大学の大衆化・グローバル化が進行する現代の中国。時代の変化に合わせて様々な教育のあり方が試みられる中、総合大学を母体とした新たな高等教育機関としての独立学院が90年代末に誕生した。本書は、独立学院というユニークな制度の発足から今日に至る展開を辿るとともに、その多様な教育実践、教育効果、そして直面している課題も捉えた包括的研究の書！

東信堂

日本同様、大学の大衆化・グローバル化が進行する現代の中国では、時代の変化に合わせて様々な教育のあり方が試みられる中、総合大学を母体とした新たな高等教育機関としての独立学院が90年代末に誕生した。本書は、独立学院というユニークな制度の発足から今日に至る展開を辿るとともに、その多様な教育実践、教育効果、そして直面している課題も捉えた包括的類書なき総合的研究の書である。

目次

まえがき

序章 本書の狙いと分析の視点

- 第1節 研究背景と問題の所在
- 第2節 先行研究の到達点と限界
- 第3節 分析視点と研究枠組み
- 第4節 調査データの概要
- 第5節 本書の構成

◆ 第一部 〈成立編:新制度の発足〉

第1章 独立学院の登場・現状・課題

- 第1節 制度創設の原因
- 第2節 独立学院の類型—機関レベルから見た独立学院制度の複雑性
- 第3節 制度の複雑性に関わる問題と研究課題の再提起

◆ 第二部 〈展開編:普及に伴う質保証と差別化〉

第2章 政府を主体とする外部質保証と実施効果

- 第1節 研究背景と問題
- 第2節 独立学院の質保証に関わる政策誘導 — 「自立化」政策を中心に
- 第3節 外部質保証の効果と限界 — 政策誘導に対する独立学院の動きから
- 第4節 小括

第3章 機関別進学者の属性から見た独立学院の社会的イメージ

- 第1節 研究目的・課題

第 2 節 使用データと分析指標の説明

第 3 節 分析

第 4 節 小括

第 4 章 応用型教育の展開と効果 — 政府・機関・学生の視点

第 1 節 問題意識・研究目的・課題の提示

第 2 節 独立学院に期待されている教育活動及び役割分担—政策分析

第 3 節 応用型教育の展開状況と浸透程度—比較事例分析

第 4 節 学生評価から見た応用型教育の浸透—達成点と問題点

第 5 節 教育充実度の規定要因

第 6 節 小括—結論と示唆

第 5 章 独立学院の教育効果とその規定要因—アウトカムの視点

第 1 節 問題意識・研究目的・課題の提示

第 2 節 データの使用と指標の設定

第 3 節 課題 1 の検証—応用型人材の達成度から見た質保証と差別化

第 4 節 課題 2 の検証—応用型人材に応えるコンピテンスの達成度から

第 5 節 質保証と差別化から見る教育効果の規定要因

第 6 節 小括—結論と示唆

第 6 章 消費者としての学生(卒業生)から見た独立学院への投資価値

第 1 節 研究目的・研究枠組み・仮説の提示

第 2 節 分析視点と使用データの概要

第 3 節 分析—教育サービスが投資に値するのか

第 4 節 学生の愛着度を高める規定要因

第 5 節 小括

◆ 第三部 〈将来展望編：変貌〉

第7章 独立学院制度の将来展望

第1節 「三角形モデル」による独立学院の動向—理論上

第2節 制度面への展望—廃止の方向にある中国独立学院の選択

第3節 教育の特質構築に向けての展望—質向上と差別化の形成

第4節 社会面での展望—非公的機関に対する社会環境と態度の改善

◆ 第四部 〈示唆編：高等教育発展への示唆〉

終章 高等教育発展への示唆

第1節 知見の整理

第2節 高等教育発展への示唆

第3節 今後の課題

参考文献／あとがき／事項索引／人名索引

出版社：東信堂

出版時間：2024年4月

◆ 本書のあらすじ

本書は、高等教育発展の新たな試みの一つである中国独立学院制度を事例とし、その発足・普及・変貌への考察を通じて、高等教育が少子化・国際化・多様化といった複雑な社会環境に生まれた様々な課題に対応するため、中国ではどのような試みが展開されているのか、高等教育発展の新たな試みである独立学院制度は、高等教育発展においてどのような示唆をもたらすのかを解き明かすものである。

本書では、Public-Private Partnership モデルの構想のもとで誕生した新たな高等教育機関の妥当性や価値を検証することを通じ、研究視点、研究手法、使用データ、分析指標の面において、総合的、且つ体系的に見直しを試みた。具体的には、分析方法には縦断的・横断的な手法を用い、研究視点には理論・事例・学生評価などの多様な体系的な視点があり、使用データには在学生調査と卒業生調査を用いる。さらに、分析指標には、「既得情報」「教育環境」「学生関与」「アウトカム（満足度、教育目標の達成度、知識・能力・資質の習得、教育有用性）」といった IE0 モデルに基づく諸指標に加え、満足度が陥りやすい独断と偏見をある程度回避する「自分の在籍する学部を他人に勧めるか」と「自分の学部が投資に値するのか」という投資価値の有無を測定する愛着度指標もある。それにより、より厳密に、中国の独立学院制度を事例として、Public-Private Partnership モデルが高等教育での活用可能性への検証を試みた意義は大きい。そのため、Public-Private Partnership モデルが教育機関、特に私立大学の運営や管理、革新にどのように活用されるのか、また証拠に基づく政策立案（EBPM）に対する検証などを探求している世界中の大学関係者にとって、本書は必読の書となると思われる。

本書の構成は以下の通りである。

まず、本書全体の前提として序章では、中国高等教育における独立学院制度をめぐる賛否両論や廃止論などの社会背景を踏まえ、問題の所在を提起する。さらに、それまでの研究の限界を検討し、研究の意義、分析視点、そして研究の枠組みを明確にする。以下では各章の概略を示している。

第一部は、〈成立編〉と位置づけ、第1章によって構成されている。第1章では、中国における「独立学院」制度の誕生と拡大の背景となった要因、及びその特殊性を探求することを目的とする。Clark (1983) の「調整の三角形」理論に基づき、国、研究機関、市場（学生と投資者）というステークホルダーの視点から、独立学院の登場・拡大の要因を解き明かしている。また、独立学院の複雑性と多様性、特殊性に伴う問題点を

明らかにし、これらを通じて、社会、政府、市場の視点から序章で掲げた五つのリサーチクエッションの妥当性と本書の分析視角の有用性を述べている。

第二部は、〈展開編〉として、第2章から第6章までの構成で、学生の属性、教育プロセス、学習成果や教育の有用性などの体系的な側面から、他の高等教育機関と比較しつつ、独立学院の質保証と差別化を検証している。

まず、第2章は、政府が独立学院に対する態度と誘導に焦点を当て、外部質保証活動が実施されたのか、及びその効果について検討する。質の低下といった初期の問題が政策規制によってどのように解消されたのか、質の向上と差別化に向けた政策誘導の限界についても触れている。

第3章では、学生の視点から独立学院の社会的イメージの変化を、20年にわたる発展と外部質保証の背景のもとで検討している。その結果、「高所得・低学力」というイメージが払拭されたが、国立大学の代替機能としての独自性の確立はまだ明確ではないことが示されている。

第4章は、第3章とは異なり、「独立学院」を主体とする内部質保証活動とその達成から独立学院の質保証と差別化を考察している。この目的に対して、第4章では政府・機関・学生の視点及び、機関別教育充実度から独立学院における応用型教育の展開の実態と浸透程度について分析・考察し、政策目的が機関の意思決定にどの程度浸透しているのか、そしてその限界について述べている。

第5章では、固有の教育目標の設定とその達成という意味での「質保証」と、母体大学や他の高等教育機関との「差別化」という二つの視点から、独立学院の教育効果を分析・考察している。そして教育効果を高める規定要因をステップ重回帰分析によって明らかにしている。その上で、応用型人材育成の達成度と、独立学院間の質の二極化について論じている。

第6章は、教育有用性と母校への愛着度の指標に基づき、消費者である在學生と卒業生の視点から見て、独立学院には教育投資の価値があるのかを検証している。

第三部の〈将来展望編〉として、第7章では、独立学院として持続する方向が見えなくなっていることを前提とし、制度的変革の理論的動向に基づいて、これらの独立学院が直面する制度的、教育的、及び社会環境的な課題を検証し、将来への展望を提示している。

第四部の〈示唆編〉として、終章では、これまでの分析結果を各章ごとに改めて整

理した上で、独立学院制度の存在意義と社会機能の再評価を試みている。独立学院の功過・是非を踏まえ、研究方法の妥当性、研究成果の利用価値、将来の展望、そして政策批判の可能性など、本書の新たな学術的価値を明らかにし、高等教育の発展への示唆を提示している。

最後に、高等教育発展の新たな試みとした独立学院の歴史的経緯及びその将来性についての展望を検討するにあたり、本書が新たな視点を提供し、研究者、政策立案者や、教育関係者にとっての指針となることを切に願うものである。